



Collaborative Online International Learning



海外大学と接続なんて…
と思っていないですか？

上智大学・お茶の水女子大学・静岡県立大学は、
2018年度「大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等の大学間交流形成支援～」
に合同で採択されています。



Greetings



Sophia University

上智大学 学務担当副学長 伊呂原 隆

新型コロナウイルスが経済、社会、そして個人に対して様々な悪影響を及ぼしたのは否定できない事実です。しかしながら、もしも教育に対してもたらした一つの光明があるとすれば、それはオンライン教育を身近にしたことかもしれません。しかも、極めて短期間に全世界共通で。

コロナ禍のせいで、世界の多くの大学はオンラインを受動的に授業に取り入れたのが実態だと思います。しかし実際に使ってみると、時間的にも空間的にも、学びの自由度を高める大きな魅力がオンラインにあることに気づかされました。この長所はコロナが完全に終息しても消えることはなく、むしろ積極的に活用していくべきではないでしょうか。

物理的な移動を伴う留学と比べ、オンラインを活用した国際協働学習のCOILでは、学生の時間的、経済的負担を大幅に軽減し、治安等の問題から国外へ出ることを躊躇する学生に対しても訴求力があります。さらに、特定の国に留まった交流とならざるを得ない留学とは異なり、COILの場合には、同時に複数の国々との交流を可能にし、授業のトピックに合わせて今週は米国、来週はアジア、再来週はアフリカ・・・と接続先を変えながら多様な価値観に触れる方法なども考えられます。

このように様々な可能性を秘めたCOILを多くの皆様には是非ご活用いただきたくお願いいたします。



Ochanomizu University

お茶の水女子大学 理事 副学長(国際交流・男女共同参画担当) 石井 クンツ 昌子

このガイドラインを手になされ、「これからCOILを始めたい」、「授業をより良くしたい」とお考えの先生も多いと思います。ただどう始めたら良いか、躊躇されるかもしれません。しかし、COILは特に難しい縛りのない、自由かつ多様なオンライン教育の一つの概念に過ぎません。

コロナ禍にあっては、オンラインで授業をされていることと思いますが、このオンライン授業に、海外大学の教員や学生を加えることで、もうCOILとなりうるのです。

海外大学等にお知り合いの教員はいませんか。どの国籍でも(日本人でも)、どの言語でもよいのです。その方と連絡を取り、普段の授業にグローバルな視点を加えてみませんか。授業15週のうちの1回だけでも複数回でも回数は自由です。先方の教員から講義して頂いたり、両大学の学生同士がSNSで意見交換をしたりと手法も様々です。本ガイドブックにはCOILのノウハウが多く詰まっています。

本学は、事業開始の2018年度に4件のCOILを実施し、4年間で約20件にまで増加しました。

学生は、将来、海外を舞台に競争・協働し、予想不可能な事を解決しながら未来を切り拓かねばなりません。教育手段の一つとして、一人でも多くの教員にCOILを実施頂ければと願っております。



University of Shizuoka

静岡県立大学 副学長(国際交流担当) 富沢 壽勇

静岡県立大学は2018年にCOILプログラムへの参加開始以降、米国の連携諸大学との協働授業はもちろん、タイやモンゴルなどの本学協定校や非協定校にも対象を拡大適用して海外遠隔授業連携の充実化に努めて来ました。

COILでは条件が許せば対面教育や現場体験を適宜組み込む方法も効果的と思われます。本学ではCOILの一環としてフィールドスタディを企画・主催し、静岡の地場産業を連携大学の留学生や日本人学生と一緒に視察したり、異文化体験したりする機会を提供して来ました。

コロナ禍によって各大学でも遠隔授業の導入が加速し、多くの教員が対面授業に加えて遠隔授業という新たな方法を体得するに至り、COILの可能性と効力の認識も飛躍的に高まったと言えます。海外大学とは授業時間の差異が大きな障害ですが、それはオンデマンド型授業や同時双方向型授業を柔軟に選択しながら、ある程度解決できる実感も得られました。この技法はリカレント教育などにも応用可能です。さらに各教員の持つ内外の教育・研究のネットワークを既存のCOILネットワークに積極的に逐次接合させて行くことで遠隔連携は深化・拡大します。静岡県立大学はこのCOIL事業の可能性を連携大学と共にさらに追究・開拓してまいりたいと存じます。

Index

1: COILについて知る

COILとは	04
科目、パートナー	05
パートナー探しの留意点	05
実施回数と期間による目的と学習効果	06
具体的な事例・各大学のCOIL授業	08

2: COILの導入が決まったら

事前準備	12
実施形態と利用できるツール・アプリケーション*	13
*Zoom、Flipgrid、Google Classroom、Padlet	
シラバス(学生への情報提示)	14
実施と評価(留意点とアドバイス)	15

3: COILに役立つTips

アイスブレーキング、チームビルディング	16
ファシリテーション	17

4: COILに関するFAQ

各大学の事務局サポートなど	18
---------------	----

What is COIL?

COLLABORATIVE
ONLINE
INTERNATIONAL
LEARNING



COILとは?

オンライン国際協働教育。

オンラインで海外大学と接続し、授業内外で交流・協働をおこなう教育手法。

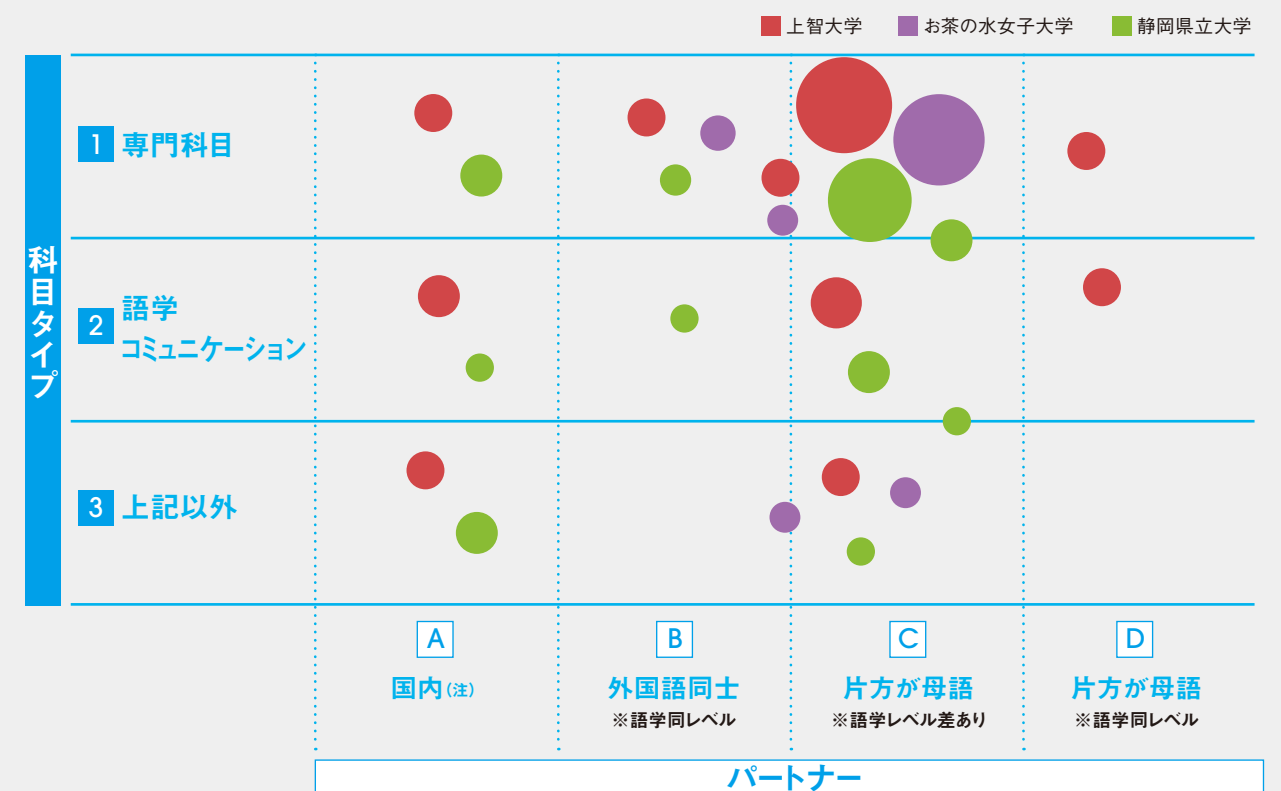
COILの意義

- 2か国以上との協働学習や比較学習が容易に可能。
- 学生のリーダーシップ能力、プロジェクトの企画、運営能力、ICTリテラシーの向上。
- 「科目」ごとの連携による教員間ネットワークの醸成（共同研究への可能性）。
- カリキュラム上の制限や様々な理由から留学が難しい学生への国際交流機会の提供。
- オンラインと対面を組み合わせた教育手法による新たなグローバル教育の形。

連携の手法例

- Zoomなどのビデオ会議が可能なアプリケーションを活用した同期接続。
- メッセンジャーやSNSを活用した非同期のディスカッション。
- 講義や学生発表の録画を交換し、フィードバックやQ&Aを同期または非同期で実施。

COILタイプ別科目数分布



- A** 使用言語や時差などを問わずCOIL導入が容易。外国語利用の場合B~Dも参照。
(注:日本の大学で留学中の外国人学生など、国内の大学間でのオンライン協働学習もCOILに含む)
- B** ・お互いの母語以外の外国語だが、同等レベルの意思疎通が可能。
・アジア、オセアニア地域の場合、大きな時差なく接続が容易。
- C** ・母語利用者との理解度の差が生まれるが、外国語利用者にとっては語学上達の足掛かりや効果が期待される。
・他地域の場合、時差への配慮、非同期との組み合わせも必要。
- D** ・同等に高度な国際交流や異文化理解が可能。
・他地域の場合、時差への配慮、非同期との組み合わせも必要だが、授業外での学生同士の協働・交流も期待できる。

言語以外の要素

- 学術面：学年、専門知識
- 文化的背景
- 経済発展面：開発途上国・先進国
- 日本文化や日本語への興味関心

上記言語以外に、国や地域、大学や専攻によって、参加学生の様々な要素がCOIL実施の目的や効果に影響する。

パートナーの探し方

- ・ 共同研究や一緒に仕事をしたことのある人のネットワークを活用
- ・ 自大学の事務局を活用：授業の目標やパートナーの要望を伝える
- ・ 外部情報を活用：“COIL Connect for VE”



coilconnect.org

COIL実施回数・期間による目的と学習効果



専門科目



語学・コミュニケーション科目



実施回数・期間

専門知識の習得、高度な国際交流と異文化理解
目的・方法

グローバル教育を実体験として学びに繋げることができる
期待される学習効果

1回

他大学教員をゲストスピーカーとして招く

COILの体験／試験的導入

科目内容や学生の特性を問わず取り入れたい

「グローバル」「海外」に目を向けていない学生にも、新しい視点を与える

2～3回



●異なる地域・国の比較により多角的な視点を養う



●異なる言語・文化に直接触れる機会を増やす



●外国語、異文化への理解を深める足掛かりを得る

複数のトピックスを扱う

基礎的なCOILの実践(同期／非同期)

グローバル教育の導入

適度な回数設定により、
学生の興味・関心が維持しやすい

外国語習得に積極的でない学生でも
グローバル教育を
実体験として学びに繋げることができる

長期
(1か月以上※)

※4～6週での実施が多い。



●異なる地域・国の比較により多角的な視点をより深める ●専門分野への理解が深まり、その内容について効果的に他者に伝えるスキルを培う



●実践的なスキルのレベル向上を図る



●異なる言語・文化に直接触れる機会を増やす



●外国語、異文化への理解を深める

複数のトピックスを扱う

プレゼンテーション、グループワークやディスカッション

動画の作成など、一定期間を要する
課題への取り組み

同期／非同期を組み合わせた
多様なCOILの実践

より一層深化した交流を体験できる

短期留学や短期語学研修などに
近い教育効果が低費用で渡航を伴わずに得られる

通常授業に留まらない多様な学びの
アプローチ方法やスキルを向上できる

具体的な事例・各大学のCOIL授業

科目タイプ

- 1 専門科目
- 2 語学・コミュニケーション
- 3 上記以外

パートナータイプ

- A 国内
- B 外国語同士(語学同レベル)
- C 片方が母語(語学レベル差あり)
- D 片方が母語(語学同レベル)

上智大学

1 C 科目：グローバルメディアと日本
(グローバル教育センター)

テーマ

日米のソフトパワー

実施方法

米国の2大学とビデオ交換・テキストによる非同期接続とZoomの同期接続の2ステップを踏んだ連携。

学習効果

- ・日米の学生が協働作業を行い、科目の専門テーマおよび異文化理解を深めた。
- ・3大学のシラバス・授業時間に大きな乖離がなく、通常の授業時間を活用できた。
- ・ビデオ交換→テキストによる質疑応答→Zoom交流と段階を得たアイスブレイキングにより同期接続も円滑だった。
- ・複数回の接続により、学生の参加意欲が回を重ねるごとに高まった。

1 B 科目：国際教育開発学ゼミ(教育学科)

テーマ

移民労働者、ニューエコノミー、地域経済/社会、教育に新型コロナウイルスのパンデミックが与えた影響

実施方法

- ・タイの大学と、オンライン講義とディスカッションを組み合わせた同期接続複数回。
- ・1か月程度かけた両大学混合のグループごとの共同リサーチ(タイ学生：フィールドワークによる調査、現地でのインタビューなどを担当、上智学生：文献のリサーチを担当)。
- ・SNSによる両大学教員からの指導。
- ・プログラム最終日にグループ最終成果発表会を実施。

学習効果

- ・多様なオンライン学習方法を最大限に活用した有意義な協働学修の実現により、双方の学生が多角的な視点での理解を深めることができた。
- ・コロナ禍において困難となったフィールドワークを現地学生が行うことで、上智学生にも同等の知見が得られる効果があった。

1 D 科目：Modern Japanese Art History
(国際教養学部)

テーマ

舞台「蝶々夫人」を題材とした協働学習

実施方法

- ・米国大学とZoomの同期接続講義、非同期接続のグループワークを組み合わせた連携。
- (上智は美術史、米国は舞台芸術の科目)
- ・4週にかけて米国学生は舞台装置(衣装、大道具等)の作成、上智学生は歴史の見地からデザインの批評をそれぞれ担当。日米混合グループにて、議論とグループワークを行った。

学習効果

- ・COILで繋ぐことにより、理論と実践という芸術教育の両側面を日米双方に補い合う学修が可能となった。
- ・米国におけるアジア人の描かれ方や、近代日本の描き方について国際比較を通じた学びを提供できた。

2 C 科目：ACADEMIC COMMUNICATION 2
(INTERMEDIATE II)(言語教育研究センター)

テーマ

ホスピタリティ

実施方法

- ・外部無料プラットフォームサイトを利用して米国大学と上智学生が交流できる場を作成の上、非同期接続。
- ・自由にビデオなどをアップロードして意見交換。

学習効果

- ・異なる視点からの意見を互いに共有し合うことで、大学内の授業だけでは得られない異文化理解やコミュニケーション能力を培うことができた。

2 C 科目：留学準備講座(グローバル教育センター)

テーマ

アメリカの文化紹介

実施方法

- ・米国大学の学生がアメリカ文化に関するビデオを作成し、上智学生が視聴の上、テキストでフィードバックする非同期接続。
- ・Zoomによる同期接続での意見交換も複数回実施。

学習効果

- 留学を検討する学生が、実際の渡航前に異文化について理解を深め、英語によるコミュニケーション能力を高める機会を提供できた。

2 D 科目：English Skills(英語学科)

テーマ

日本の大学生活や教育制度

実施方法

- 米国大学の日本語を学ぶ学生向けに上智学生がグループごとにプレゼン後、米国学生とのQ&Aセッションを実施するZoomによる同期接続。

学習効果

- 英語運用能力を高める学科必修授業において、米国学生との直接的な意見交換による対話を通して、学生の異文化理解およびコミュニケーション能力を培うことができた。

上智大学×静岡県立大学

1 C 科目：【上智】卒業研究(看護学科)
【静岡】発展看護実習：国際看護
(看護学科)

テーマ

看護学生のヘルスプロモーション

実施方法

国内2大学、海外3大学(米国、モンゴル、タイ)とZoomによる同期接続で学生による発表、Jamboardによる意見交換を実施。

学習効果

- ・学生を主体とした英語でのプレゼンテーションや各国の共通点や違いについて意見交換を行う場を提供することにより、各国の学生が国際理解を深めることができた。

[その他の成果]

- ・継続的な連携で、より専門性の高いテーマでの接続計画へと発展。教員同士が連携し、5大学共同で事前・事後アンケートや参加者へのCertificateを作成。将来的には合同研究に発展させることも視野に効果的なCOIL実施に繋がる授業となった。

具体的な事例・各大学のCOIL授業

科目タイプ

- 1 専門科目
- 2 語学・コミュニケーション
- 3 上記以外

パートナータイプ

- A 国内
- B 外国語同士(語学同レベル)
- C 片方が母語(語学レベル差あり)
- D 片方が母語(語学同レベル)

お茶の水女子大学

1 C 科目：グローバル化と言語教育I(グローバル文化学環)

テーマ

平和教育を見つめ直す：第二次世界大戦と日米関係を中心に

実施方法

米国のヴァッサー大学とZoomによる同期合同授業6回、講演会4回、日米学生パティ間での準備を経て4日間のセミナー開催。

学習効果

- ・複数回の接続、講演会によりテーマへの知識が深まった。
- ・学生に企画の主導権を持たせることで主体性を培った。
- ・お互いの国の言語で発表することで、互いに教え合い、語学力の向上や信頼感の醸成が図れた。

1 D 科目：運動学(芸術・表現行動学科)

テーマ

舞踊

実施方法

- ・海外の教員を招き、講義および実技ワークショップを実施。
- ・講義に加えて、基礎的な運動学に関連する科学的な内容のクイズ形式の質問に対し、学生がオンラインで答える形での交流を行なった。

学習効果

- ・海外協定校との実技交流が、現地の教員のオンラインによる指導により実現した。
- ・海外での運動学領域の最新の知見が共有された。

3 D 短期研修(国際教育センター)

テーマ

国際コミュニケーション、STEM

実施方法

米国大学と合同で企画。Zoomでの同期授業、学習管理システムによる非同期授業、米国大学学生とのディスカッション。

学習効果

- ・米国の社会的・文化的な動き、科学技術についての知識を深めた。
- ・専門的な英語の語彙を増やすことができた。
- ・リテラシーとディスカッションスキルが強化できた。
- ・将来のキャリア選択に関する知識が拡大した。

上智大学×お茶の水女子大学×静岡県立大学×ゴンザガ大学(米国)

1 A C

国内3大学+米国ゴンザガ大学連携科目

テーマ

ジェンダー問題やリーダーシップの国際比較

実施方法

- ・上智大学、お茶の水女子大学、静岡県立大学による国内COILと、ゴンザガ大学とのCOIL+オンライン短期留学を組み合わせたプログラム。
- ・国内3大学の担当教員が輪講形式で、日本、韓国、アジアの社会とジェンダーの諸課題について講義とディスカッションを3コマ実施し、学習成果の合同発表。
- ・同時進行でゴンザガ大学のジェンダー・多様性とリーダーシップに関する講義に参加し、4大学によるCOILも実施。
- ・春期休暇中、ゴンザガ大学が提供するオンライン短期留学プログラム”Inclusive Leadership: Creating Cultures of Innovation, Engagement, and Belonging”を受講。米国社会とジェンダー・多様性の概論、それを踏まえた包摂的リーダーシップについて集中的に学ぶ。

学習効果

- ・国内COILを通して、日本国内やアジアにおける多様性やジェンダーに関する理解を深め、同時に米国とのCOILで国際的なアプローチを含めた多面的視点を養う。
- ・COIL講義による事前学習を経て、短期留学プログラムに参加する上での基礎知識と留学先大学とのコネクションや学習姿勢を得ることが可能。

静岡県立大学

1 C 科目：生体情報分子解析学特論／先端医療薬学特論(大学院薬食生命科学総合学府)

テーマ

生体シミュレーションについて ほか

実施方法

- ・大学院における理系分野でのCOIL。
- ・海外大学の教員をゲストスピーカーとして招いて同期接続。

学習効果

世界の第一線で活躍する日本人研究者の講義により、海外で働くイメージを持たせるとともに、質疑応答では研究留学にまつわる話についても学ぶ機会に恵まれた。

1 A 科目：日本語表現法IA(国際関係学部)

テーマ

国内大学における留学生向け授業との交流

実施方法

- COILとしては珍しい”国内COIL”と”日本語COIL”の実践。
- ・国内の大学に留学中の学生をパートナーとし、音声説明付きポスター発表に対して同学学生がコメント。
- ・英語を一切用いず、日本語のみを使用して活動。

学習効果

学内で多様な留学生と交わる機会が豊富ではない学生にとって、刺激的で有益な体験ができた。

2 A 科目：English Communication(言語コミュニケーション研究センター)

テーマ

異なる分野を学ぶ日本人学生同士が英語で意見交換して交流

実施方法

- ・国内の大学を相手校に選ぶ”国内COIL”の実践。
- ・動画ツール・Flipgridに英語のビデオスピーチをアップロードし、パートナー大学のグループメンバーから英語でコメントをオンデマンドでもらう活動。

学習効果

英語によるコミュニケーション能力の向上と相手に何かを伝える楽しさを知る機会を提供することができた。

事前準備

パートナー(海外大学の教職員)との打ち合わせ

- パートナーが日本の大学とCOILを実施する意義について考える。
- パートナー教員と授業の目的が一致するか確認する。
一致しない場合、お互いのゴールを共有し、連携が円滑に進むようバランスを取って互いに合意する。
- 双方のCOIL実施におけるメリットをより可視化する。
- COIL授業以外での連携の可能性(共同研究など)についても話し合う。

確認すること

- 学期スケジュール、時間割
※双方のアカデミックカレンダーを確認
- COIL実施回数・実施時間、使用するツールやアプリケーション
※同期接続の場合、時間割と学生の集中力を考慮し、60-90分の実施時間が多い
- COIL受講生数、グループワークの実施可否
※グループごとの人数・分け方、使用言語、TAやファシリテーターの有無を確認

(各大学での確認事項)

・教室のICT環境、通常授業の実施形態(オンラインのみ/ハイフレックス)

COILの実施形態

01 同期

授業時間内に、海外大学の授業と接続し、講義の共同実施、グループワーク、ディスカッション等を行う。
(例:海外大学の教員による講義を受講し、質疑応答などで指導してもらう)

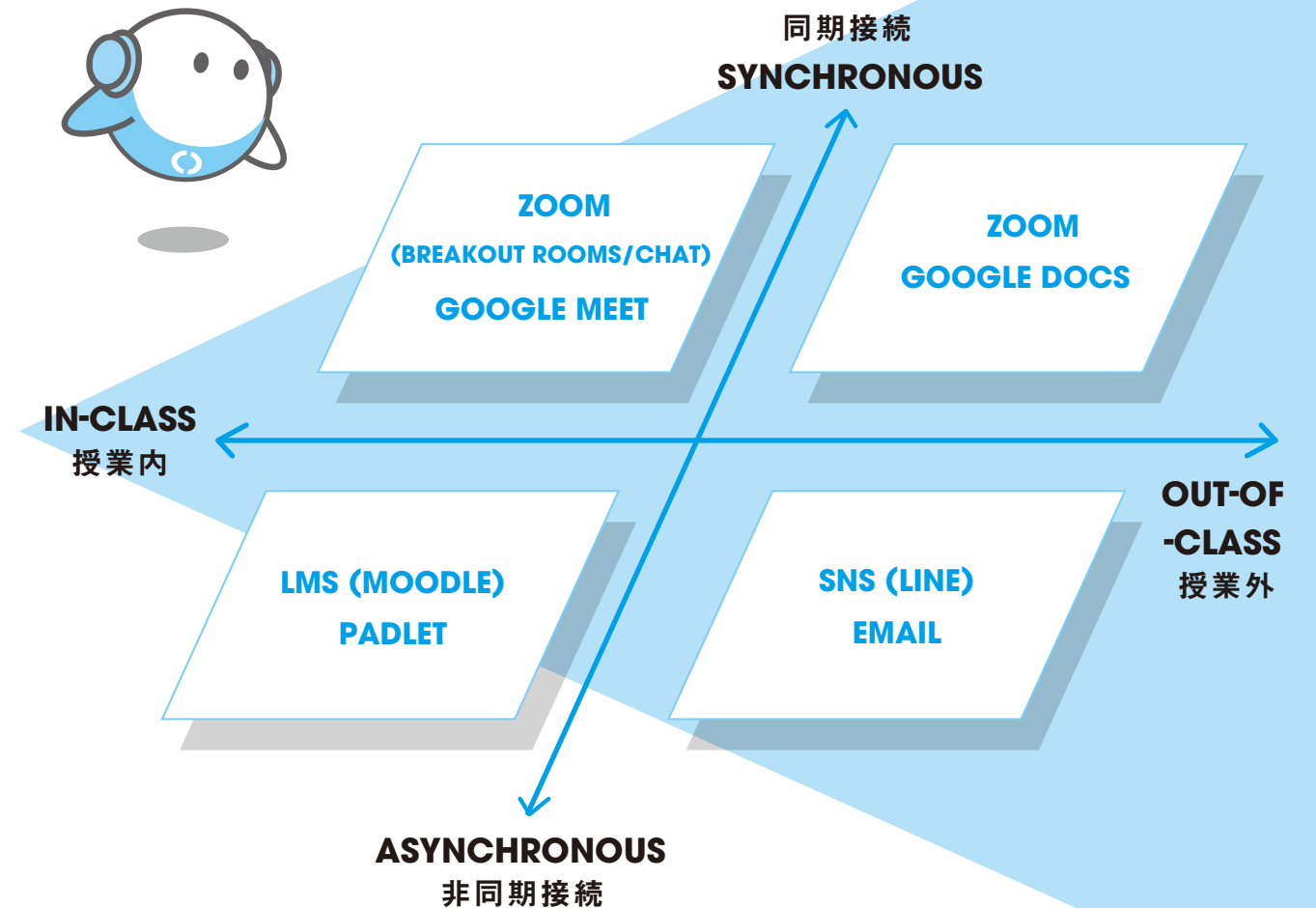
02 非同期

海外大学の科目と連携し、双方の教員によるビデオレクチャー、学生のプレゼンテーションの交換、SNSやチャットなどでの交流・意見交換を行う。

01 + 02

同期と非同期を組み合わせることも可能。

実施形態と利用できるツール・アプリケーション(例)



目的別に利用できる主なツール・アプリケーション

目的	授業での用途	ツール・アプリケーション
双方向 (又は複数拠点間) コミュニケーション	ウェブ会議、チャット、 通話等による同時接続	Zoom, Skype, WebEx, Google Meet SNS (Facebook, LINE 等)
	ウェブ上のフォーラムに おける意見交換	Padlet, Canvas, Moodle, Chatwork, Google Classroom, SNS (Facebook, LINE 等)
共同作業	ウェブ上でのファイル共有、 ブログ・ウェブサイト作成	Google Docs, Dropbox, WordPress, SNS (Facebook, LINE等)
ビデオ配信	授業等の 動画コンテンツを配信	YouTube, Google Drive, EZvid

シラバス作成(学生への情報提示)

- パートナー教員とシラバスを共有し、お互いのCOILの実施内容を確認する。
- 履修登録前の学生に対して、当該科目のCOIL実施について情報を提示する。

※但し、COIL実施計画の進捗具合により、シラバスの明記についてはこの限りではない。

シラバスの表記例



(和文)

一部の授業では、米国等の海外大学とのCOIL(オンライン上の非同期または同時双方型授業)を実施する(3-5回予定)。

米国〇〇〇大学とのオンライン上での交流のため、語学に自信の無い者は自分の関心分野の用語を中心に自習する必要がある。COILとしてICT機器を使ったアクティビティをオンライン上で多く行うため、PCやタブレットなどが活用できるよう準備し、各自グループワークなどに積極的に参加することが求められる。COIL内でのアクティビティは録画して海外大学に共有されることがある。

(英文)

This course will attempt using Collaborative Online International Learning (COIL) based on real-time communication during the classes. Students' presentations will be recorded and send to partner universities and receive feedbacks on videos.

Students are required to attend the Zoom meetings and will be responsible for participating group discussions, virtual fieldworks, COIL and problem-solving exercises.



実施と評価 (留意点とアドバイス)

実施

- 両大学の学生の語学レベルに差がある場合、同期・非同期のいずれかに偏らず、両方を活用することが望ましい。
(例：英語が母語ではない日本側の学生にとって同期よりも非同期の方がアウトプットしやすい。時差がある場合は非同期で互いに配慮する。)

同期接続の交流前

- 学生が事前に用意した紹介ビデオを互いに視聴する、非同期で交流できるオンラインプラットフォームを利用する。
- 海外大学の学生が母語を使用する場合、母語以外の言語の存在を再認識させる機会を設ける。
(例：米国の学生に日本語について紹介する)
- 学生には授業外での交流を行うことも事前に勧めておく。

同期接続の交流時 (P16-17参照)

- TA(学生に年齢が近いとなお良い)を配置し、各グループのファシリテーター兼監修役を担ってもらう。
- Zoomの場合、教員はbreakout roomに参加はせず、学生がプレッシャーに感じず自由に議論が出来る場を設ける(教員がモニタリングすることは必須ではない)。
- チャット機能などを利用し、日本側の学生が日本語で書いた文章をGoogleなどの翻訳サイトやソフトなどを使って海外大学の学生に共有する。

評価

- 科目内のCOIL実施分の評価について明確に数値化して(例：授業評価に占める割合、COILにかかる課題数など)学生に対し事前に提示する。
- COIL実施後のリアクションペーパーで評価する。
- 長期間のCOILの場合、授業ごとに単発で評価するより、複数回実施する中で経過観測することで、より学生の学習効果が得られるため、それに伴う評価が可能となる。

□ アイスブレイキング

- グループ分けをする場合、日本側の学生は事前にグループ内でアイスブレイキングしておく。

- ・お互いを知るための時間を取り、自ら発言することへのためらいや他者に対する懸念をなくす。
- ・学年の違いや立場による上下関係を意識しないようにする(例:ニックネームでつながる等)。
- ・「私たち日本人は…」という言い方はやめ、個人として("We"で括らず"I"で)発言する。

- COIL実施前に、事前講義として

日本と海外でお互いの文化を学ぶ機会を用意する。

- ・交流相手の文化背景や特性を理解する。
- ・文化心理学的な視点、異文化コミュニケーションの視点を学ぶ。

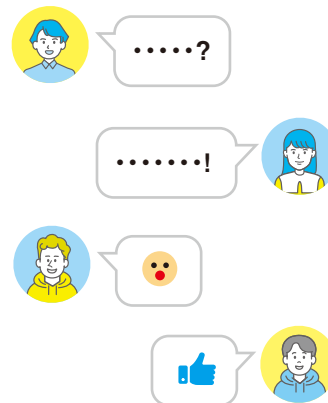
(例：米国の場合)

- ・自己主張(他人の意見を気にせず感じたことを発信)する訓練を受けている。
- ・沈黙は「意見がない」というふうに解釈されることもある。
- ・ユーモアの違い(ジョークを交えて場を和らげる)。



□ チームビルディング

- 学科、学年、性別、海外経験、語学能力などを考慮し、グループ分けを行う。
- グループワークに活用できるプラットフォームを紹介する: Google Drive、WhatsApp、LINEなど。
- グループワークに協力的ではない参加者がいる場合、グループによって成果の差が出てしまうこともあるため、参加者間の不公平感をなくすべく、授業のゴール設定や課題などを統一することの必要性を考慮する。



□ ファシリテーション

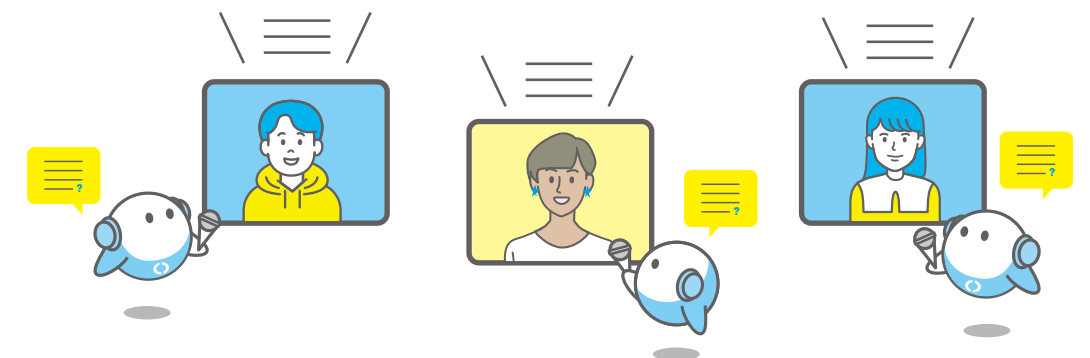
- 同期接続の交流の場合、担当教員の講義⇒グループワーク(例:Zoomのbreakout room)⇒総括の順に進むことが多い。

- 教員がファシリテーターになる。

- ・グループワーク時の参観者、又はメインルームでの相談役として、話がうまく進まないグループへ適切な質問をする。
- ・総括の際、問題提起をする、また、グループや所属大学の偏りなく、多くの参加者が発言できるようにする。
- ・参加者の発言をまとめ、COILとして目標にした学びまでつながるようにする。

- 各グループにTAを配置する場合、ファシリテーター兼監修役を担ってもらう。

- COIL経験がある学生がいる場合、各グループに配置し、グループ内のファシリテーター役を任せる。



01

COILは同期型である必要がありますか。

いいえ。同期型(リアルタイム)で行われる交流だからこそ得られる学習体験はあるものの、時差などの関係から非同期型の交流も多く実践されています。また、テキストを交換する場合、自身の語学レベルに自信がない学生も交流しやすいという側面もあります。

【非同期型の実践例】

- ・事前に撮影した動画の共有
- ・SNSを用いた交流
- ・Padlet等のスレッドや掲示板の利用

FAQ



03

科目内でのCOIL実施頻度のルールはありますか。

いいえ。実施頻度や回数などのルールは一切ありません(学期中1回の接続でも問題ありません)。初めてCOILを導入される場合は、まずは1-2回の講義から始める教員の方が多いです。それ以降は科目の構成や目的に応じて回数を増やすこともご検討ください。

02

COILで連携する相手はどのように見つけられますか。

他大学に既に交流がある教員がいる場合、直接先方とご相談いただいても構いません。もし相手が見つからない場合は、各大学の担当部署にお問合せください。協定校の教員とのマッチング支援を行います。

連携先への謝金など、COIL実施にあたり費用が発生する場合には、予め担当部署までご相談ください。

04

学部や学科に制限はありますか。

制限はありません。どのような学問分野でもCOILを取り入れていただけます。導入する学部や学科の範囲は年々拡大しています。ぜひ本ガイドブックを参考に、導入をご検討ください。

05

COILを実施するにあたり大学からのサポートはありますか。

はい。各大学で主に以下のサポートをしています。詳細は各大学の担当部署にお問い合わせください。

- ・パートナーのマッチング支援
- ・COIL実施に係る費用補助
- ・機材貸与
- ・学内研修、外部研修費用補助

その他のご質問は各大学のCOIL担当部署にいつでもご相談ください。

COIL導入について、分かりやすく説明した動画も公開しています。

